

補遺-1 (G 多賀城市八幡地区)

2011年11月21日(月)

報告者名	沼田 愛	被調査者生年	1931年(男)
調査者名	菊地 暁	被調査者属性	天童家家臣子孫
補助調査者	沼田 愛		

地域の概要と生業

話者は昭和6年に七ヶ浜で海苔養殖を行う家に生まれ、昭和28年にK家に養子にきた。先にK家に話者のおばが嫁いでおり、その夫婦に子どもがいなかったためである。当時のK家はかやぶき屋根の家屋だったが、その後2回建て替えている。

このあたりは、以前に鎮守嶋観音があった場所(現在、消防用ポンプ車の倉庫がある)よりも南は、田んぼが広がっていた。水が足りなくて干ばつになるので、天童頼澄が天童氏の土地に加瀬沼を作った。現在でも加瀬沼には水神が祀られている。砂押川には、もともと鎮守橋(?)のあたりに堰があった。ほかにも、新田(にいだ)堰などいくつかの堰があった。現在は、加瀬沼から勿来川まで通してそこから三陸自動車道の地下を通過して八幡上二の田に引いている。以前は鎮守橋の堰で栄や桜木の田に水を流していたが、昭和10年頃、八幡にあった山(現在高台になっているところ)の土で埋め立て、海軍工廠建設に伴い移転してきた人びとが居住する宅地になった。その後も宅地・工場用地などの開発が続き、現在は水を流していない。

集落移転の前の中谷地のあたりは、海軍工廠が建設されたとき、機関砲をつくる工場になった。戦後、話者が養子にきた頃、まだトウシンコウ(東京通信工業)という社名だったソニーが進出してきたときは、海軍工廠の病院があった跡地に工場が造られた。

話者はK家に養子に入ってから農家となった。その頃、K家は2町3反くらいの田を持っていた。在地地主であったため、農地改革で取り上げられることはなかった。農作業はほとんど家族で行い、ユイで行うのは田植えのときのみであった。テマドリはいなかったが、賃金を出して助けてもらうことはあった。話者は農閑期になると水道屋や鉄工場でも働いていた。

減反政策が始まる前までは農家でも生計が立っていたが、現在はJAに全部委託している。米の値段が下がってコンバインや乾燥機の費用とつりあわず、赤字になるからである。話者には3人の子どもがいるが、全員勤め人である。

天童家とその家臣

K家は天童家の家臣である。KSが、天童家について八幡に移ったK家の初代で、話者は14代目にあたる。天童氏は最上氏と争って負け、家臣約10名をつれて八幡地区にきた。(天童氏に関する書物を調査者に見せながら)天童頼澄が八幡に移ってきた初代である。天童家現当主は功さんである。

宝国寺は天童氏とその家臣の菩提寺である。もともとは天台宗の林松寺といったが、天童氏の菩提寺となるときに頼澄の法名を取って臨済宗の宝国寺となった。K家も宝国寺の檀家である。

喜太郎神社は天童家の氏神である。山形県天童市にある喜太郎神社と同じものである。天童市のものは、十数年前にお社が焼けてしまった。八幡地区の喜太郎神社の管理は天童さんが行っている。お祭りもあったような気がする。以前は神社の周囲に木が茂っていたが、現在は切ってしまう。

天童家の家臣を中心に、約48名[?]で「天童契約」を組織していた。契約講の集まりは、年に1回、1月から3月くらいの農閑期に行われた。

契約講では、死者が出た際に穴掘り、棺を担ぐひと、埋めるひとなどの順番を年交代で決めていた。話者が若いときは義父がやっていたので、話者自身は経験していない。葬儀の際には、青っぱをつけた竹に、十字の足をつけて立たせたりした。棺は座棺であった。昭和31年頃、ひいじいさん（話者から見て義理の祖父）の葬儀の時には土葬であった。こうしたこともやらなくなった。

火葬に変わるころ、墓場の区画整理をした。寺は八幡地区のなかでも少し高台になっているが、湿った土に埋めた遺体は、肉が腐りきらずに残っていることもあった。高い場所は乾燥しているので大丈夫であった。埋葬し直すにあたり、遺体をその場で焼いたが、すごい臭いがした。

現在、火葬は塩竈の斎場で行っている。火葬に変わりはじめたころは、竹のかざりを作っていたが、だんだんやらなくなった。竹もないし作れるひともいないからである。知らせ役もなくなった。契約講を親睦のために続けた方がいいのではないかという意見も出たが、喪家に集まっても、やることなく（受付くらいはやっていた）ただ菓子食いをするばかりになり、喪家に迷惑がかかるので契約講はやめた。やめて10年くらいになる。

また、備荒倉講というものもあった。備荒倉講とは、仮に米粉2斗を借りたとしたら、2斗5升にして返すというようにして、利子のようにして余分に返される分を貯蓄していくものである。利子に相当する分は、講員で分配した。講の所有する倉もあった。小作人がいたときは借りるひともいたが、戦後みんなが自作農になり借りるひとがいなくなったのでやめた。昭和36~38年頃にやめた。講の文書は天童家にあったが、現在は多賀城市に寄付している。

現在は、天童家の家臣で集まる機会はない。在仙天童会という天童氏を中心とした天童家の家臣らによる組織があり、会報が毎年送られてくる。年に一度仙台で集まりも開かれる。このほか、家臣の子孫が参加して、山形県天童市の古城の山にある天童氏の墓にお参りに行く。その記念写真を持っている。今年も行った。話者によると、涌谷の伊達市の墓にも年に1回、盆くらいには天童さんがお参りに行っているらしい。涌谷の伊達家の墓には鍵がかかっているの、それを開けてから焼香する。

天童家に分家はいない。K家も、話者より3代前にひとつ出たが、あとはない。近隣にあるK姓の家は、話者の家とは血縁関係はなく、明治になって名字をつけるときに勝手にK性を名乗ったもの。ツケベッカ（付け分家）というかたちである（「ツケベッカと言うんですか?」と確認したところ、そう言うのかどうかかわからないが、そのようなものだと返答）。葬儀の際などにつきあいがある。

キジラシマ（鎮守嶋）観音

K家の東側には、現在国道45号線から鎮守橋に抜ける道が通っているが、以前はK家の敷地であり、鎮守嶋観音（話者はキジラシマ観音と発音、チンジュガシマのことだと市史に記載された文字を示す）と池があった。K家の以前の小字が「鎮守」。鎮守嶋観音の番地が鎮守1、池の番地が鎮守2、K家の番地が鎮守3であった。K家の敷地が分断されて道路ができたあと、町が消防のポンプ車を置く倉庫を鎮守嶋観音があったところにつくった。鎮守嶋観音は現在不磷寺に移転している。

鎮守嶋観音がいつからこの地にあるのかははっきりしない。しかし、天童家の家臣ではなかったE家が正月になると注連縄や門松を用意していたことから、鎮守嶋観音は天童家が八幡に来るよりも前からこの地にあったのではないかと話者は推測している。E家の先代は、生前、鎮守嶋観音と末の松山浄水場にあった祠に毎年注連縄を張り来っていた。E家は天童家やその家臣たちの菩提寺である宝国寺ではなく、不磷寺の檀家である。

K家では、鎮守嶋観音の管理人（別当ともいう?）のような役割をしてきた。正月に注連縄を張ったり、のぼりを立てたりした。また、銅でできた杯に入れた餅を供えて、拝み、下げることもやっていた。餅を供えるのは正月三が日、正月7日、小正月と、偶数の月の1日、節句の日だった。祝い事のように餅を搗くので、その度に持って行っていた。正月に鎮守嶋観音に餅を供えるときは、白い餅をふたつ重ねにして、一対あげた。それ以外のときは、餅の上にあずきをのせたものを供えた。

鎮守嶋観音の祭りは、不磷寺に移転する前には9月26日か27日に行われた。その日は夜にも参拝に来るひとがいた。K家でのぼりや提灯をたて、草刈りなど掃除をし、御膳をあげた。提灯は話者が両腕で抱えきれないほどの大きさのもので、仙台の鉄砲町にある店に頼んで3年に1回買った。御膳はK家の前当主があげていたのを見

たことがあるが、自身はやっていない。

鎮守嶋観音のボンボン（参拝したときに鳴らす鐘）が何度も盗まれたり、賽銭箱が荒らされて困ったことがある。15～20年くらい前の6月、まだ鎮守嶋観音がK家の前にあったころ、鎮守嶋観音の御神体が盗まれた。話者が畑仕事から帰ってきたら、3、4日前から堂がガランとしていたと教えられ、警察に届け出た。御神体を作りなおすのに50万円くらいかかった。その費用は寄付も募ったが、K家でも半分以上を負担し、9月の祭りに間に合わせた。その後、警察からご神体が発見されたと連絡があり引き取りに行ったが、御神体を見たことがなかったので、盗難品として並べられた沢山のご神体どれが鎮守嶋観音のものか判別できずに困った。

また、鎮守嶋観音は安産の神様でもあった。安産祈願に参拝したときには、奉納されている枕（お手玉のようなもの）をひとつもらってきて、安産であれば枕を2つにして返した。

鎮守嶋観音が不磷寺に移ってから不磷寺が管理しているので、K家は何もやっていない。鎮守嶋観音の祭りも寺がやっており、その日は寺から呼ばれるので出席している。

K家の年中行事

庭にある祠はK家の氏神であり、稲荷をまつている。正月や鎮守嶋観音の祭り、節句など、月に1回くらい餅をついていたので、鎮守嶋観音と同様に餅を供えた。餅はあんこや、ずんだなど季節によっていろいろで、決まりはなかった。塩や水を供えることはない。この祠は土台との間をコンクリートで接着しているが、これが裏目に出て震災の時にはひっくり返った。

話者が養子にきた頃の正月では、注連縄をない、門松を立て、クリの木に餅を付けたりした。注連縄は家の主人が風呂に入ってからだを清めてから緋う。部屋の四方に巡らせるものと、各部屋につける小さいものがある。緋には松、昆布、幣束を挟み込んだ。昆布は「喜ぶ」からきている。注連縄は年取りの日の昼につけて、夜には灯明をつけて拝んだ。

餅を搗くのは、正月前は12月28日。1月14日にも搗いた。何升の餅をついたかは覚えていない。農作業が休みの日である1日や、節句などの祝い事の日にも餅を搗いた。

津波とその後

八幡は貞観地震（869年）の津波で被災している。八幡にある歌枕「末の松山」を詠った歌に、貞観地震の津波を示しているものがある。この津波は浮島地区まで到達したといい、津波で島のようになったことが地名の由来となっている。不磷寺は現在臨濟宗だが、元々は日蓮宗で、仙台の沼向（現仙台市宮城野区中野沼向か）にあったものが津波で現在地まで流されてきたという。

3月11日の津波の際、話者は自宅にいた。ここまでは津波は来ないだろうと消防のポンプ小屋にひとが集まっていた。最初の津波の高さの予報では3メートルだったが、実際には（一番高い所で）10メートルだった。

K家は人的被害なかった。家屋は津波で床上30センチメートルくらいまで浸水した。K家は平地としては少し高いところにあり、家屋の建て替えの際に少し盛り土をしていることから、話者のこれまでの津波の経験のなかでは、モグチ（門口）まで水が来たことはあったが、家の中まで浸水したのは初めてだという。畳を張り替えや家屋やアパートの温水器の取り換えなどで、約1,000万円の修理費がかかっている。床に被った水は塩水なので、拭いても塩が吹いてきた。海水に油は混ざっていなかったが、黒い泥もかぶった。話者が八幡上2地区の辺りに1町1反ほど所有する田は塩分が強く、今年は米が作れなかった。とはいえ、津波で生活がそれほど変わったわけではない、と話者は語っている。

おばあちゃん（話者のおばで義母にあたるひとか？）は、今年100歳になったが、震災で祝い事を自粛する雰囲気があったので、誕生日には何もしなかった。そろそろお祝いをしようかと考えている。